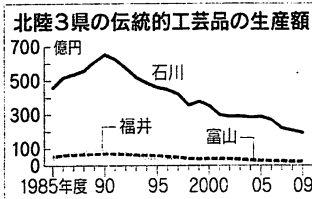


北陸3県の伝統的工芸品の
2009年度の生産額と増減率

県	品名	2009年度		1990年度	
		生産額	増減率	生産額	増減率
富山	高岡銅器	1,313	▲2.0	▲67.1	
	井波彫刻	800	0.0	▲62.0	
	片山挽物	170	▲7.1	▲69.6	
	高岡漆器	70	▲22.2	▲73.0	
	越中和紙	18	▲10.0	▲85.9	
合計		2,371	▲2.5	▲66.3	
石川	輪島塗	6,000	▲7.6	▲62.7	
	加賀友禅	4,018	▲2.3	▲79.0	
	山中漆器	3,300	▲8.3	▲58.7	
	九谷焼	3,040	▲10.5	▲59.4	
	金沢箔	2,182	▲2.7	▲83.9	
	金沢仏壇	200	0.0	▲34.4	
	牛首袖	175	▲29.4	▲50.2	
	金沢漆器	150	▲25.0	▲25.0	
	七尾仏壇	49	0.0	3.7	▲8.5
加賀繻	14	▲46.1	▲88.5		
合計		19,128	▲7.0	▲70.7	
福井	越前漆器	600	▲3.2	▲91.3	
	越前和紙	540	▲18.1	▲60.5	
	越前打刀物	218	▲13.1	▲65.4	
	越前焼	101	▲9.0	▲49.7	
	若狹塗	20	▲4.7	▲33.3	
	若狹めのう細工	5	66.6	▲83.3	
合計		1,484	▲10.9	▲83.9	
3県合計		22,983	▲6.8	▲71.8	

(注)単位百万円、増減率%、▲は減



伝統的工芸品産業振興法(伝産法)で指定された北陸3県の21品目について、日本経済新聞が産地組合から09年度の生産額を聞き取り、伝統的工

縮む伝統的工芸品生産

石川、初の200億円割れ

昨年度 輪島塗など販売不振 191億円

石川県の2009年度の伝統的工芸品の生産額が合計191億2800万円と前年度に比べて7.0%減少し、記録のある1974年度以降で初めて200億円を下回った。輪島塗、加賀友禅などの業界がリーマン・ショック以降の販売不振から立ち直っておらず、高額品が苦戦している。自治体が産地支援を強化しているが、旧加賀藩からの「芸王国」の復権の展望は開けていない。

3県は6.8%減 229億円

北陸3県の生産額の8割強を占める石川県は、4年連続で減少した。バブル経済期の高額消費によって同県の生産額がピークを迎えた90年度の約3割の水準まで落ちている。01年度に300億円の大台を割ってから8年で、さらに約100億円が減少した。品目別では九谷焼が2桁減。生活スタイルの変化による花器などの需要減や消費者の節約意識のほか、御業界には人間国宝の人気作家、徳田八十吉さんの死去の影響を指摘する声もある。高級呉服の加賀友禅も大手の呉服小売店の経営破綻などで44.9%減になった07年度以降、回復の兆しが

見えない。09年度の実績が3割近く落ちた牛首袖(つむぎ)の産地組合は「一般の消費者が手を出せる価格は30万円が精いっぱい」とみている。伝統的工芸品の従事者数も減少に歯止めがかからない。09年度は3県合計で9595人と初めて1万人を下回った。九谷焼の場合、「駆け出し職人の給料は月10万、12万円程度」(石川県立九谷

焼技術研修所)といい、各産地とも後継者が集まりにくい。一部自治体は伝統的工芸品の新しい支援スタイルを模索する。石川県輪島市は基幹産業である輪島塗の器などを購入する飲食店や旅館に費用の4分の3を直接補助する制度を導入。金沢市は09年度に設立した加賀友禅技術振興研究所を拠点として、加賀友禅の技術を応用した洋

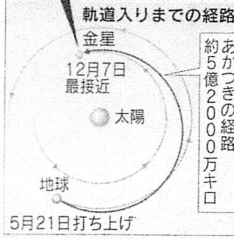
装やインテリアといった新分野の開拓を強化している。生産者主導の取り組みでは、九谷焼の若手の創作集団「九谷熟」がカブトムシやカタツムリのオー

ブシエ作品で脚光を浴びたほか、大徹八井漆器工房(輪島市)が食器洗い機で洗浄できる輪島塗の椀(わん)を売り出すなど、新しい需要を開拓する動きがある。

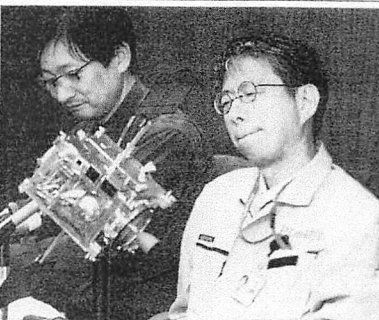
「あかつき」非常時モード

金星軌道入りきょう成否判明へ

宇宙航空研究開発機構（JAXA）は7日、日本初の金星探査機「あかつき」を金星の周りを回る軌道に入れようと試みた。成否を判断できない状態に陥った。通信の不調で探査機の位置がつかめなくなった。ただ異常は7日午後10時過ぎに解消された。あかつきは7日朝に主



見ても探査機の電源を確保できるシステムが動かない所に行っちゃいけない所」と述べ、探査計画の続行に期待を示した。



記者会見で険しい表情を浮かべるJAXAの中村正人・あかつきプロジェクトマネージャ（7日、相模原市内）

上から送ったが、探査機に届かなかったという。現在、通信には1秒間に1文字程度の情報量しか送れない「低利得アンテナ」を主に使っており、逆噴射の成否や探査機の位置の解析に手間取っている。より性能が高い「中利得アンテナ」は10分間に40秒程度しか使えない。

金星は地球とほぼ同じ大きさで兄弟惑星とも呼ばれるが、表面の様子はまったく異なる。温度はまったりと異なる。温度は金星460度で硫酸の雨が降り、秒速1000メートルと呼ぶ強風が吹きまわっている。高温は大気の96%を占める温暖化ガスの二酸化炭素(CO2)が、因との説もある。

あかつきは過酷な環境の謎を解くのに威力を発揮すると期待される。世界で初めてセラミック材を使った三重工業製の主力エンジンを搭載。耐熱性を高め、厳しい飛行環境に耐えられるよう方を期した。

惑星探査、日本は後発組

あかつき 先端機器で謎に挑む

主な惑星探査計画（打ち上げ年）

1972	米国「パイオニア10号」、木星の写真撮影
77	米国「ボイジャー2号」、木星・土星・天王星・海王星を調査
89	米国「ガリレオ」、木星の写真撮影
96	米国「マーズ・パスファインダー」、火星に探査車着陸
97	米欧「カッシーニ」、土星の大気観測、小型測定機着陸
98	日本「のぞみ」、火星周回軌道の投入失敗
2003	欧州「マーズ・エクスプレス」、火星着陸に失敗
05	欧州「ビーナス・エクスプレス」、金星の大気観測など
08	米国「フェニックス」、火星で水分存在を確認
10	日本「あかつき」、金星の大気観測
11	米国「キュリオシティ」、火星探査（予定）
14	日欧「ベビコロンボ」、水星探査（予定）

1969年に米国が「パイオニア10号」に成功した後、欧米や旧ソ連などが惑星探査計画を相次ぎ開始した。70年代には米ソ連などが惑星探査計画を相次ぎ開始した。70年代には米ソ連などが惑星探査計画を相次ぎ開始した。70年代には米ソ連などが惑星探査計画を相次ぎ開始した。

米国の過去の探査に比べ観測機器の性能は飛躍的に向上しており、新たな事実が浮かび上がるとの期待が大きい。JAXAの阪本成一教授は金星の大気の動きに関するデータを地球と比べれば「地球の天気予報の精度向上につながる」と指摘。温暖化など気候変動の仕組みの理解にも、重要な手掛かりを与えてくれる可能性がある。